


## ■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。  
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

**\*** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

**CC** : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Todai OCW 学術俯瞰講義  
Copyright 2012, 島田竜登

The University of Tokyo / Todai OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series  
Copyright 2012, Ryuto Shimada

2012年度冬学期学術俯瞰講義:「世界史」の世界史

## 近代的学問としての世界史・3

# 近代を超越して新たな世界史を描く

東京大学文学部 東洋史学研究室  
島田竜登

# 担当の講義

## 「近代的学問としての世界史」

- ▶ 第3回:10月29日  
「実証すること、法則を見出すこと」
- ▶ 第4回:11月5日  
「比較史のなかの日本・アジア」
- ▶ 第5回:11月12日  
「近代を超越して新たな世界史を描く」

# 前回のまとめ

- ▶ 比較史とは何か：手法と目的
- ▶ 事例としての比較経済史

事例①：大塚史学；事例②：雁行発展モデル

## ▶ これまでの比較史研究の問題点

- ①西洋が常にモデルとなりえるだろうか？
- ②日本が常にモデルとなりえるだろうか？
- ③一国史研究の限界：各国の歴史は、それぞれが独立して進んでゆくのではない。  
**相互の影響が存在するはず**。例えば、宗主国と植民地の関係など。
- ④アジア・アフリカ(史)研究の進展  
⇒優劣を拒否する比較史研究の台頭、同時代世界における多様性の強調  
**でも、モザイク状の世界史でいいの？**

**★いずれにせよ、比較のフレームワークを作った時点で相応の制約が加わる。**

- ▶ **一つのヒント：オランダ東インド会社と奴隷**

# 前回講義のアンケートから

## 比較史の有用性

- ▶ 比較史は問題も孕んでいるが、歴史を世界史規模で捉えるには最適な方法だと思った
- ▶ 比較史は世界史たりえないが、世界史の重要な構成要素の一つだと思う
- ▶ 現時点では主流な「国」を単位として「一国史の集積」とみる方法が有効ではないか
- ▶ 世界史研究のフレームワークとしては「地方史」の集積とみなすのが良いと思う
- ▶ 比較には相違点と共通点を比較する手法があると思うのでその点に関して詳しく知りたい
- ▶ 比較史研究において、一つの側面に注目し発展・未熟の比較をすることは全ての国に一定の示標、注意すべき点を示している点で喜ばしいことだと思う
- ▶ ヨコではなくタテの比較史(10世紀の日本、13世紀の日本)もあるのではないか

# 前回講義のアンケートから

## 比較史の危険性

- ▶ 比較史の場合、モデルの選び方で内容が大きく変わるので、作りたい比較史を作れてしまう気がした
- ▶ 比較のポイントを決めた時点で比較対象が限定されてしまうということもあるのだと知って面白いと思った
- ▶ 西洋の方が日本より発展しているからモデルにするというのは、何を「発展」の基準としているかによって変わってくると思った
- ▶ 近代化・文明化に大きな価値を認めてきた歴史を見れば西洋や日本をモデルにすることは仕方がない。比較にはその時代ごとに価値を置かれるものが基準になるのだろうと思う
- ▶ 歴史学もその国の「規模」によって偏ってしまうと考えた(経済規模の大きい国では「奴隷制度」という暗い歴史もその克服に注目して「美化」している)
- ▶ 日本は欧米をモデルとした歴史研究を行い、アジア諸国は日本をモデルとする、この吸収・発展の繰り返しが世界の画一化に繋がっていると感じた
- ▶ 比較史研究は絶対的な価値観から脱却しようとする試みとして価値を持っている一方で、客観的に二者を比較しようとしてもその考察には必ず主観が入ってしまうと思った

# 前回講義のアンケートから

- ▶ 奴隷制や植民地拡大、戦争により資本を蓄積した西洋型発展モデルを現代社会に適用することなど不可能なはずだ
- ▶ 2つの文化を同じように扱い分析できるのか、という点は比較学の課題であるように思う
- ▶ 無意識のうちに日本と馴染み深くなさそうなところ、現在の日本の社会と大きく異なるように見えるところを比較の対象から外してしまっていたことに気付いた
- ▶ 歴史研究が単に経済発展のための道具とならないために歴史家には一定の倫理や哲学が必要だと思った、先生が研究者として心がけている原理や哲学は存在しますか
- ▶ 日本と西洋を比較することが多いとあったが、西洋では西洋とどこを比較することが多いのか
- ▶ 国家という考えそのものが主権国家体制を根底とする現代的視点に立脚するもので古代、中世を対象とする比較史は有益な結果をもたらさないと思う
- ▶ 比較経済史においても近代歴史学的要素だけに固執せず多様性・土着性といったポストモダンの要素も取り入れるべき
- ▶ 歴史の法則を見つけて未来を予想しようとしても偶然が大きく歴史を変えてきたことも認識しなければならないと思った
- ▶ どの程度の精密さ、または粗さで比較をすることが望ましいのか

# 前回講義のアンケートから

## 比較史を超えて

- ▶ 「みんなちがってみんないい」という考え方も問題がある(例:運動会の徒競走で全員一番)
- ▶ 分類も大事だと思うが何とかして世界を全体としてひとつで捉えてみたい
- ▶ 比較史から優劣の概念を排除することは一見多様性を認める好ましいものであるように見えるが、問題意識を手放していることに過ぎず現状肯定に陥る危険もあるのではないか
- ▶ かつての比較史が実用的なものであったのに対し、現在の比較史はどちらかというと学問のための学問という風になっている気がする。実用性という面での今後の比較史の展望は何か
- ▶ 比較史を学ぶ意義は世界を広く見渡すということにあると思う。発展モデルとしてとらえるよりも優劣をつけずに諸地域の多様性を考察するという目的で学ぶべきものだった
- ▶ 現代の社会に歴史学を適応させるためには国家単位ではなく要素単位で研究をすべきではないか
- ▶ もっと多様な比較軸が用いられて多様性が強調されていくべきだと思う



# 前回講義のアンケートから

## その他

- ▶ 社会科学の各分野は明確にというよりは境界線がある程度交差しているような気がした
- ▶ 奴隷の議論では、多国間の比較の際はなるべく普遍的な形で用語の定義をしないと名辞に拘束されて偏った見方しかできなくなってしまうことが分かった
- ▶ 各国の状況が異なるのに他国を参考に政策を決めようとしても無意味ではないかと思った
- ▶ 産業革命や市民革命などが起こったのは東洋より西洋が先だが、どちらが早いか遅いかではなく、それらが起こった過程だと思う
- ▶ 「むかしながら」という言葉があるように、世界は発展し続けられないという考え方の中にも過去をよしとする趣向があると思った
- ▶ 比較史の目的がある対象の分析に別の対象をモデルとして利用することであるならば、歴史の法則性・規則性があるという前提にたたないと成立しないので、まず歴史の法則性の存在証明が必要ではないか
- ▶ 自国がモデルにあてはまらない点も考えないといけないと思った
- ▶ 実証を重ねて得た一連の情報を偶然と捉えるか必然と捉えるかは個人の判断ではないか
- ▶ 「経済史」の中にも政治の影響があり、またその逆もあるとすると、最終的には「経済史」も「政治史」もその他の分野も統合する必要があるのではないか
- ▶ 先行する発展段階の国をモデルとして劣位の発展段階の国を分析する手法にはマルクス主義の影響があるのか、それとも比較の手法として自然な発想なのか
- ▶ アジア・アフリカ史研究が進展したのはそれらの地域の影響力が強まり、存在がクローズアップされるようになったからなのだろうか

# 参考) 学術用語としての「国際」「地域」

「世界」や「世界史」を模索する際に、よく考えなければ  
ならない言葉

- ▶ Nation state (国民国家、単一民族国家)
- ▶ International, Transnational と National

Inter: ~の間に、相互の; trans: ~を超えて

「国際」化が叫ばれるけど、それは「世界」とは異なるのだろうか？

- ▶ Region/Area

Area studies (地域研究) とはいうものの、地域とはいったいなんだろうか？

「地域」と「世界」の関係とは？

# 今日の講義の内容

- ▶ 学術俯瞰講義のパンフレット「近代社会においてなされてきた従来の世界史研究の諸問題を克服し、現代に生きる我々にどのような世界史の見方がありえるかを模索するため、グローバル・ヒストリーなどの近年の試みを紹介する」

⇒ 比較史(ないしはモザイク状の世界史)から眺める世界史を乗り越える世界史研究の方法を模索したい。

- ▶ ①関係史(←連関性)
- ▶ ②グローバル・ヒストリー

# 歴史学の手法としての関係史

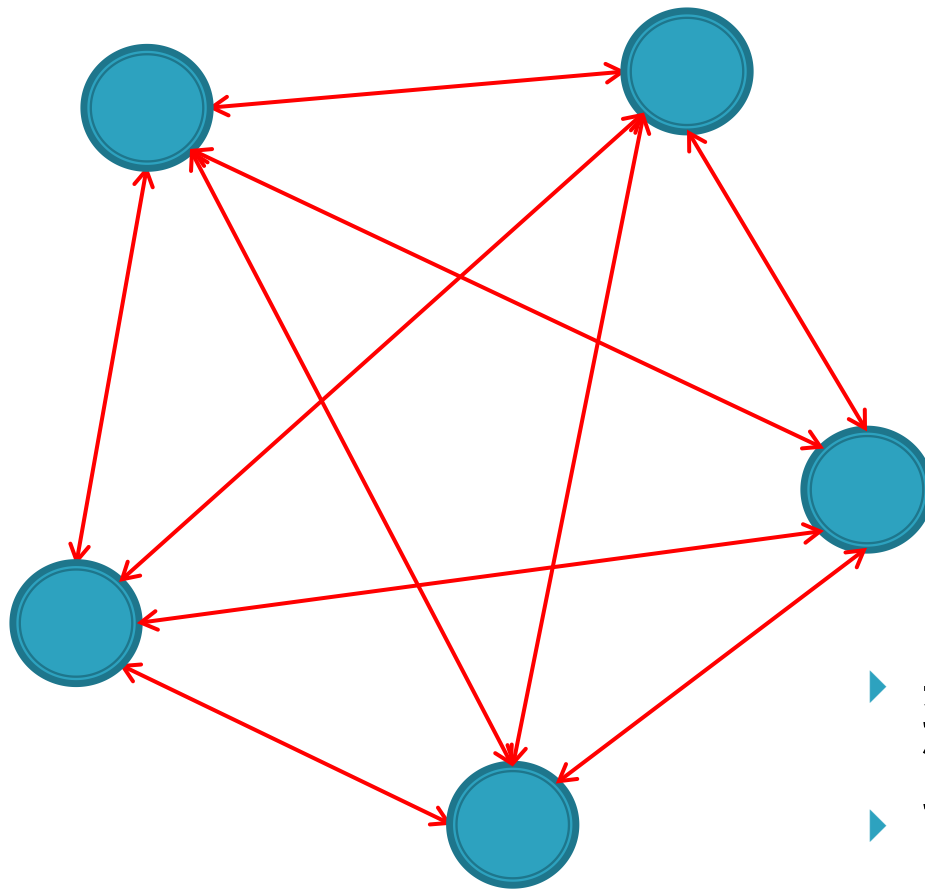
- ▶ 「比較」と「連関」: ある国や地域の歴史を世界史規模で考える際の代表的な2つの手法
- ⇒ 今日には特にこの「連関」の手法に関係する。(今日の第一の課題)

# 「比較」から「連関」へ(1)



- ▶ 一方向or双方向？
- ▶ 制度、軍事、経済、技術、宗教、文化、社会、芸術など

# 「比較」から「連関」へ(2)



- ▶ 実際は、多角的な連関関係
- ▶ ただし、連関の度合いの差が存在

# 事例：近代世界システム論

- ▶ ウォーラーステイン Immanuel Wallerstein (1930–)
- ▶ 近代世界システム論
- ▶ 15世紀以降(17世紀初め以降)の経済史を中心とした世界史像
- ▶ 3つの地域(core; semi-periphery; periphery)と外部世界
- ▶ 批判：フランク Andre Gunder Frank (1929–2005)、『リオリエント』(原著は1998年)：西洋中心主義として、むしろアジア中心の歴史像を提起。

# 関係史の限界

- ▶ 関係史は、すぐさま「世界史」となるとは限らない。
  - ▶ ありがちなテーマとしては、2国(2地域についての)
    - ①交渉史(外交、文化など)
    - ②高きから低きに流れる歴史
  - ▶ 今後の課題
    - ①双方向性を描き出せるか？
    - ②多角的関係を描き出せるか？
- ⇒検討すべき対象が、複雑なゆえに、焦点を絞ってしまいがちとなる。



# グローバル・ヒストリーとは？

- ▶ Global ←Globe (地球・球状のもの)
  - ▶ 「世界史」とは異なるグローバル・ヒストリー
  - ▶ 現在のグローバル化に対する問題意識をもとに歴史研究に挑んでいる
  - ▶ いくつかのカテゴリー
- ①地球は丸いことを意識した歴史研究(比較的長期を対象とすることが多い)  
例)新たな食物(ジャガイモ等)の伝播;銀の国際的流通⇔人類の活動への影響
  - ②球状の地球をマクロで眺めた歴史研究  
例)地球環境の変化(気候変動等)⇔人類の活動への影響
  - ③グローバルイゼーションの歴史(反グローバルイゼーションの分析も含む)  
例)西洋文明・資本主義の伝播⇔それへの適応、反発
- ↑実際にはこの③が多い。

水島司編  
『グローバル・ヒストリーの挑戦』  
山川出版社、2008年

水島司  
『グローバル・ヒストリー入門』  
山川出版社、2010年

<http://www.yamakawa.co.jp/product/detail/1746/>

# 今日のまとめ

- ▶ 参考) 学術用語としての「国際」「地域」
- ▶ 歴史学の手法としての関係史
- ▶ 「比較」から「連関」へ(1)(2)
- ▶ 事例: 近代世界システム論
- ▶ 関係史の限界
- ▶ グローバル・ヒストリーとは？

# 最後のまとめ

- ▶ 歴史学は空中戦の学問ではない。史料から始まる。
- ▶ しかし、何のために歴史を研究しているのかということ常を常に自問自答しなければ、史料は何も語らない。
- ▶ 比較史を行うときには、そのフレームワークに注意する必要がある。フレームワークを作った時点で、結論が見えてしまうこともある。
- ▶ 「国際」と「世界」は異なる。「連関」の歴史学を「世界史」的規模まで高めるのは至難の業であり、比較史同様、制約の多い叙述となりがちである。
- ▶ 真の意味でのグローバル・ヒストリーは、マクロの歴史であるかもしれない。しかし、従来の歴史に比してどのような研究の実現可能性や有用性があるのは未知数。
- ▶ 唯一の世界史なるものは存在しない。時間と空間により多様性がある。これを認めた上で、世界史を対話することが重要。

# 討論のテーマ

- ▶ 「国際」と「世界」は同じか、否か？
  - ▶ グローバル化時代のグローバル・ヒストリーとは？
  - ▶ 自然科学と人文学は協力し合えるだろうか？
  - ▶ あなたにとっての世界史とは？
- 